

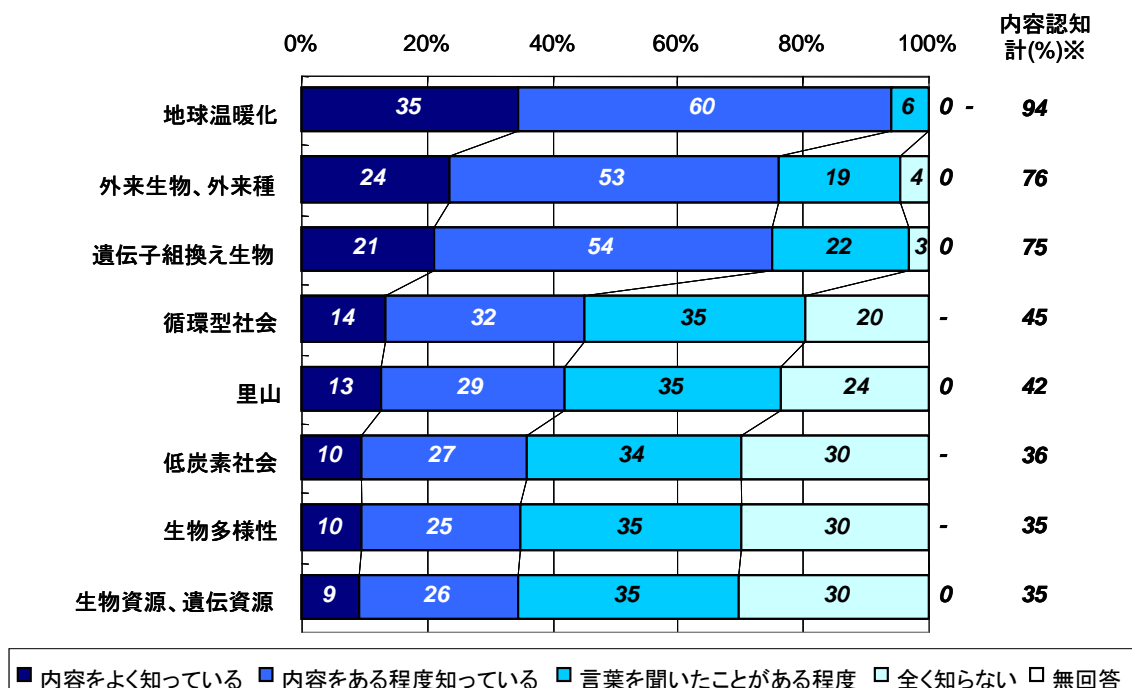
生物多様性に関する一般生活者の意識 “生物多様性” 浸透はまだこれから その恵みを感じている人は多い

ノルド社会環境研究所（本社：東京都中央区、代表取締役：久米谷弘光）は、生物多様性に関する一般生活者の意識を把握するため、2009年7月中旬に、全国の20歳以上の男女個人2,000人（有効回収）を対象としたWebアンケート調査を実施しました。

● 「生物多様性」内容まで知っているのは35%、「地球温暖化」は94%

「生物多様性」の内容まで知っていると回答した人（「内容をよく知っている」＋「内容をある程度知っている」＝内容認知計）は35%で、「地球温暖化」の内容認知計94%とは大きな差があります。しかし、「生物多様性」の言葉を聞いたことがある人を加えるとあわせて7割に認知されており、少しずつ浸透ははじめていることがうかがえます。

また、生物多様性の個別トピックのキーワードについては、「外来生物、外来種」（内容認知計76%）、「遺伝子組換え生物」（内容認知計75%）がよく知られています。



※内容認知計＝「内容をよく知っている」＋「内容をある程度知っている」

図 1: 環境に関するキーワードの認知 [N=2,000]

● 「生物多様性条約」は認知されていない、認知トップは「ワシントン条約」85%

地球環境に関する主な国際条約の認知をたずねたところ、「生物多様性条約」をあげた人は12%にとどまります。

認知トップは「ワシントン条約」85%で、「京都議定書」（80%）、「世界遺産条約」（60%）とマスメディア等で比較的良好に目にするものが上位を占めています。なお、「京都議定書」の認知が高い一方で、その上位の根拠条約であり、「生物多様性条約」と同じく1992年の地球サミット（開催地：リオデジャネイロ）で採択された「気候変動枠組条約」の認知は15%にとどまりました。

このリリースに関するお問い合わせ先：株式会社ノルド社会環境研究所
 東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー 電話 03-5524-7333 担当：^{ひじかた}土方・^{その}園
 ホームページ <http://www.nord-ise.com/>

「生物多様性条約」の枠組みの下、生物多様性に悪影響を及ぼすおそれのあるバイオテクノロジーによって改変された生物（遺伝子組み換え生物など）の移送や取り扱い等について定めた「カルタヘナ議定書」は、最も認知が低い結果（4%）となりました。

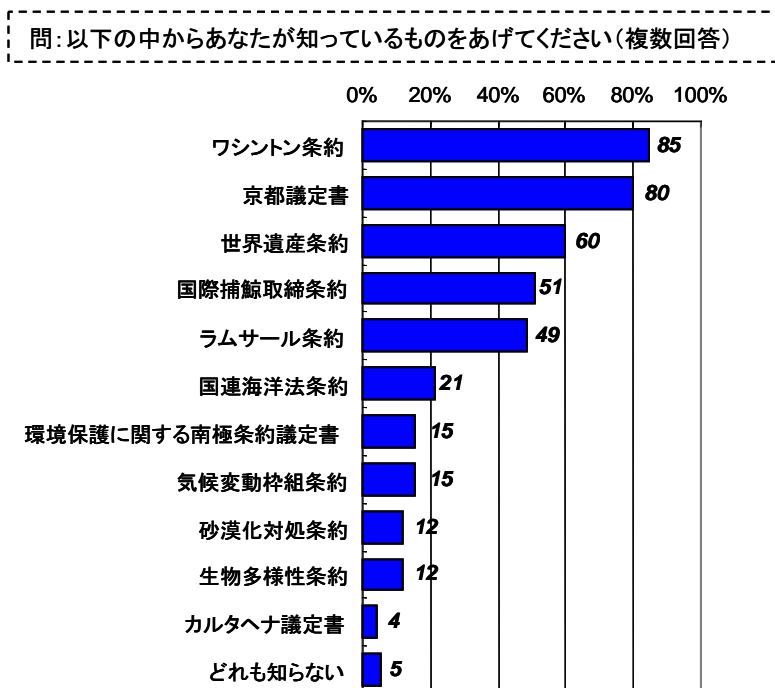


図 2: 地球環境に関する主な国際条約の認知 [N=2,000]

● 生物多様性条約 COP10 名古屋開催の認知は 1 割、中部地域で比較的高い

生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）が 2010 年に名古屋市で開催されることを知っている人は 1 割と低調です。地域別に見ると、COP10 の開催地・名古屋が含まれる「中部」では比較的高くなっていますが、それでも 2 割弱にとどまります。

前回の COP9（開催地：ボン）では、会議に先立って民間企業や市民団体のネットワークによる生物多様性の広報活動が行われ、ドイツ国内での生物多様性保全への理解促進が展開されました。日本が COP10 開催国としてリーダーシップを発揮するためにも、生物多様性に対する国民的な意識の高まりが求められるところです。

すでに様々な取組みが始まっていますが、COP10 を契機にますます生物多様性に対する理解や取組みが促進されるためにも、COP10 名古屋開催に対する関心や認知を広げていくことが期待されます。

問: 生物多様性条約の第10回締約国会議(COP10)が、2010年に名古屋市で開催されることをご存知でしたか。

(単位: %)

	全体 [N=2,000]	北海道・東北 [n=235]	関東 [n=681]	中部 [n=342]	近畿 [n=343]	中国・四国 [n=172]	九州・沖縄 [n=227]
知っていた	10	9	9	19	8	5	5
知らなかった	91	92	92	81	92	95	95

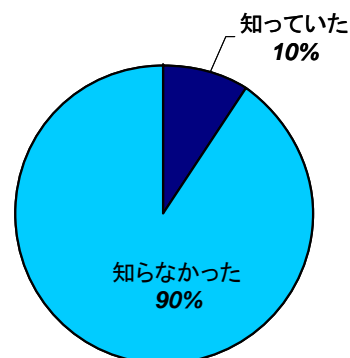


図 3: 生物多様性条約 COP10 名古屋開催の認知 [N=2,000]

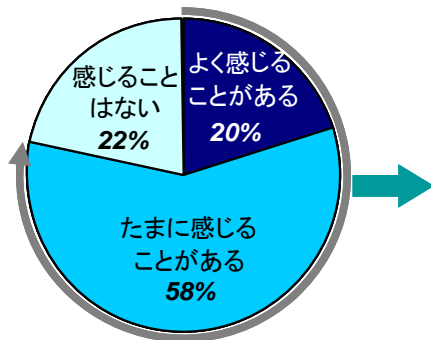
このリリースに関するお問い合わせ先: 株式会社ノルド社会環境研究所
 東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー 電話 03-5524-7333 担当: 土方 園ひじかた その
 ホームページ <http://www.nord-ise.com/>

● **生物多様性の恵みを「感じることもある」が8割、鍵は大自然、身近な自然、映像、食**

「生物多様性」についての説明（生物多様性条約 COP10 広報リーフレット：環境省生物多様性地球戦略企画室）を提示した上で、生物多様性の恵みを感じるかどうかを尋ねました。その結果、「よく感じることもある」2割、「たまに感じることもある」約6割と、あわせて約8割の人が生物多様性の恵みを感じることもあると回答しました。

さらに、どのような場面で感じるかを尋ねたところ、トップは「雄大な自然に触れたとき」(59%)、2位は「きれいな空気や水のおいしさを感じたとき」(57%)で、大自然やその空気・水に接したときに生物多様性の恵みを感じる人が多いことがうかがえます。そのほか、「自然環境に関するドキュメンタリー番組や映画、映像を見たとき」(47%)、「庭や道端などの身近な自然に触れたとき」(43%)、「生きものの命をいただく日々の料理や食事のとき」(43%)が上位を占め、映像での間接的接触や、身近な自然、食も生物多様性を実感する鍵であることがうかがえます。

問：(生物多様性と人間のくらしとのつながりに関する説明文を提示した上で)あなたは生物多様性の恵みに支えられて生きているということを感じるがありますか。



順位	生物多様性の恵みを感じる場面(複数回答)	(%)
1	雄大な自然にふれたとき	59
2	きれいな空気や水のおいしさを感じたとき	57
3	自然環境に関するドキュメンタリー番組や映画、映像を見たとき	47
4	庭や道端などの身近な自然にふれたとき	43
4	生き物の命をいただく日々の料理や食事のとき	43
6	地球温暖化や開発などによる生物種の絶滅の危機を知ったとき	41
7	地震や風水害など自然災害の被害を知ったとき	37
8	めずらしい動植物を見たとき	25
9	木材や繊維、燃料、医薬品なども生物資源由来であることに気づいたとき	23
9	動物園、植物園、博物館、科学館などに行ったとき	23
11	山菜取りや釣りなどをしているとき	21
12	地域独特の風土や文化にふれたとき	19
13	農山漁村に行ったときや農林漁業の体験をしたとき	13
14	学校の授業や市民講座などで生態学や生物多様性について学んだとき	8
15	エコツアーや自然観察会に参加したとき	7
16	その他	2

図 4: 生物多様性の恵みに対する認識 [N=2,000] とその恵みを感じる場面 [n=1,567]

● **生物多様性保全対策、「温暖化防止」がトップ**

重要だと思う生物多様性保全と持続可能な利用のための対策として、「地球温暖化の防止」をあげる人が46%と最も多い結果となりました。これは、自然環境の映像から生物多様性の恵みを感じる人が多いことからもうかがえるように、最近の地球温暖化番組等でも、しばしば温暖化の影響を受ける野生生物の様子が報じられていることが背景にあると推測されます。そのほか、「外来種による影響の防止」(45%)、「汚染物質の排出規制」(43%)が上位を占めています。外来種対策は、実際に人体に危害を加えたり、農作物に被害を及ぼすような外来種もいることから、対策の必要性を感じやすいのかもしれませんが。

一方、企業による貢献は、本業での貢献が11%、本業以外での貢献が9%と低調な結果です。最近では生物多様性保全における民間企業等の参画が重要視され、様々な取り組みが始まっていますが、まだ一般生活者には、その重要性や活動が十分伝わっていないものと推

このリリースに関するお問い合わせ先: 株式会社ノルド社会環境研究所
 東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー 電話 03-5524-7333 担当: 土方・園ひじかた その
 ホームページ <http://www.nord-ise.com/>

測され、今後の企業の取組みのさらなる進展が期待されます。また、COP10における主要議題である「生物資源利用による利益の公平な分配」はわずか6%にとどまります。生物多様性条約体制ではABS（「遺伝資源アクセスと利益の公正かつ衡平な配分（Access and Benefit-sharing）の略」と呼ばれ、長年にわたって議論が重ねられてきたテーマですが、あまり問題自体が知られていないものと思われます。私達の生活に密接に関わる重要なトピックのひとつですので、今後、COP10を契機に関心を高めていくことが求められます。

問：生物多様性の保全と持続可能な利用に関する対策について、あなたが重要だと考える対策を5つ以内でお答え下さい。

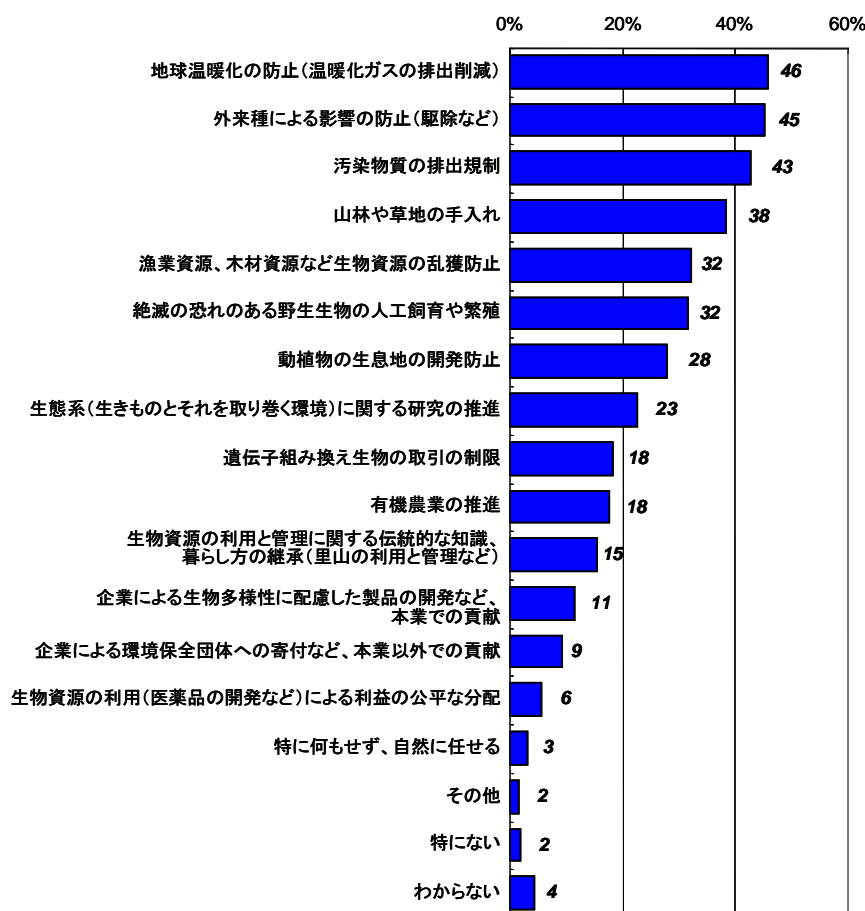


図 5: 生物多様性保全のために重要だと思う対策 [N=2,000]

本調査の概要

本調査は、ノルド社会環境研究所の自主調査「社会環境に関するアンケート調査」の一環として行いました。その概要は以下の通りです。

調査対象：全国の20歳～59歳の男女個人（インターネットユーザー）

調査方法：Web アンケート

サンプル抽出方法：生活者モニターからの無作為抽出（性・年齢・地域別の人口比に応じて抽出）

有効回収集計対象サンプル数：2,000 サンプル

調査時期：2009年7月10日～17日

※2006年～2008年調査は、同様の方法で2006年7月、2007年7月、2008年7月にそれぞれ実施しました。

株式会社ノルド社会環境研究所

“ピープルズシンクタンク”を理念とする独立系の民間調査研究機関。社会環境政策、地域計画、マーケティング、CSR、広報・コミュニケーション分野の調査研究及びコンサルティングを行なっている。

このリリースに関するお問い合わせ先：株式会社ノルド社会環境研究所
 東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー 電話 03-5524-7333 担当：^{ひじかた} 土方・^{その} 園
 ホームページ <http://www.nord-ise.com/>